

02-010

医療機関における単語検索課題を用いた音読トレーニングの指導効果の検討

成田 まい、小泉 ひろみ

市立秋田総合病院 小児科

1.目的

ひらがなの読みは学習の基盤となるものであり、小学低学年段階ではほぼすべての児童が獲得するといわれているが、流暢な読みに困難をもつLD児が存在する。読み困難児の音読支援については、ひらがな単語検索課題が効果的であることが報告されている(大山ら,2016)。しかしながら、教育機関での実践に留まるのが現状である。本研究では、医療機関のなかでの音読トレーニングの有効性を検討するとともに、半年後の支援効果の維持について検討することを目的とする。

2.方法

対象：小児神経科医によりLDと診断された小学中学年の児童(WISCのFIQは70以上、PVT-Rは評価点7以上であった)。対象児と保護者に研究の趣旨と内容を説明し成果発表の同意を得た。

学習課題：ひらがな検索課題および単音フラッシュカードを実施した。 手続き：平成30年3月～平成30年4月、週1回のトレーニング(全6回)を行い、稲垣ら(2010)のガイドライン検査課題を用いて指導前後および半年後に音読時間と誤読数の評価を行った。

3.結果

稲垣ら(2010)の基準値に基づき、指導前後の評価課題の結果を音読時間と誤読数に分けて標準化得点を算出した。音読時間については、指導前には全課題(単音連続読み課題・有意味単語速読課題・無意味単語速読課題・短文音読課題)で+2SD以上を示していたことから読み困難と評価されていたが、指導後には無意味単語速読課題以外は+2SD未満と改善した。誤読数については、短文音読課題を除く全課題で+2SD以上を示していたが、指導後にはその全課題で誤読の減少がみられた。特に単音連続読み課題では、+12.42SDが-0.94SDまで改善した。さらに、指導半年後に再評価を行った結果、音読速度は指導後の状態を維持することが可能であったことが認められた。また、誤読数についてはさらなる減少が認められ、語頭音の繰り返しは完全に消去したことが示された。

4.考察

医療機関においても単語検索課題によって、素早く単語を認識できる読み処理が促進され、読みの流暢性の改善と誤読の減少が認められた。よって、単語検索課題は音読困難の改善に有効であることを指摘できる。さらに指導効果は半年後においても維持されることから、多くの医療機関・教育機関での導入を期待する結果を得られた。今後院内では、同トレーニングを継続するとともに、教育機関との連携を行いながら、就学前段階からひらがな習得を促進する取り組みを強化していく。